BROADCASTING CREATORS' ASSOCIATION

放送人の会

No・25
2005・11・14

〒102－0094 千代田区紀尾井町1－1 千代田放送会館 3階
TEL&fax 03－3221－0019 Mail info@hosojin.com
代表幹事 大山勝美 編集担当 伊藤雅浩、松尾羊一

日韓中東京フォーラムを終えて

大山 勝美

「第五回日韓中テレビ制作者フォーラム」の熱気をはらんだ三日間が終った。韓・中チームが去った日の夕方、日本青年館の控え室をのぞくと、磯村健二氏がスタッフと後片づけ中で、部屋の空気もぐったりした中に柔らかさが漂っている。

山田尚、磯村健二、寒河江正、鈴木典之、長沼士朗、中澤忠正、加納孝夫、荻野慶人、川口健一、明神正、村上雅通、永山勉、田代勝彦、筧昌一、伊藤雅浩、松尾羊一・右の実行委員を中心に多くの方々のご尽力で「とても充実した会で・流石は日本」(中国・黎鳴氏)「来年の韓国にプレッシャー」(韓国・李康縣氏)との成果をあげることができた。

今回は中国での派手さとは別の「誠意をこめたクオリティーの高い手づくりフォーラム」を合言葉にしてきた。

ポイントにした同時通訳熟女五人のレベルは上々で感謝された。彼女たちの評「放送人の会の人たちは、若くはないけどエネルギッシュ」。さらに参加した海外組とのちょっとしたコミュニケーションのために中国吉林省朝鮮族出身留学生十五名を援軍に依頼。彼らは日・韓・中三ケきわめて重宝がられた。

日本青年館はコンパクトなつくりで、かえって幸いした。ワンフロアにすべての会場がまとめられたこともあり、参加者の親近感と一体感が生まれたと思う。

「家族」と「共同制作」を二つの柱にした参加番組の内容が多彩で質も高かった。担当者列席の討論では、専門的につっこんだ話しあいが活発に行われ、予定時間オーバーが続出した。

村上雅通氏が熊本放送で骨折ってくれた翻訳吹き替えは、簡潔で分かりやすいと好評であった。私見ながら、参加番組ベスト五はドラマ「ごめん、愛してる」(韓国)「姑」(中国)ドキュメンタリー「わがパパ、ママ」(中国)「山小屋カレー」(日本)「四つの指で描く夢」(韓国)である。特に「ごめん、愛してる」の洗練された演出力は華麗で突出していたようだ。

「共同制作」ではテレビ西日本のバラエティーや韓・中合作ドラマが披露され、本格的な合作への具体的な提案がいくつも出されて会議はもり上がった。

鄭秀雄常務委員長の気勢は「二十一世紀のテレビの新しい風は東から起こそう」で、盛大な拍手とともに会は終った。

「来年ソウルで」の乾杯で始まったさよならパーティーでは、オーケストラアジアの三カ国の歌のメドレーが流れ〝スゴバシヤスミダ〟〝辛苦了〟〝お疲れさま〟の言葉が会場に飛びかっていた。

ポスト東京フォーラム

フジテレビの味谷和哉プロデューサーは八年間韓国MBCとの合作ドキュメンタリーをつくっている。今回の日韓中テレビ制作者フォーラムに「共同制作」のシンポジウムのパネリストとして出席してもらった。「いやァ、いい会によんで下さいました」と一寸頬を紅潮させていた。共同テレビの中山和記プロデューサーも、日韓、日中のドラマをいくつか実らせていて、フォーラムに招いた帰りぎわ、「放送人の会に入れて下さいよ」と頼もしい発言があった。

参加番組担当のテレビ西日本濱田敏彦氏、CBC藤井稔氏らも放送人の会のことを初めて知り興味を示し、入会を希望してくれた。

ポスト日韓中フォーラムの主要テーマは「放送人の会の今後の展望」である。「会員の裾野をひろげる」「若手現場人の参加を」は課題として数年前から言われ続けている。

団塊の世代が停年を迎える二〇〇七年問題は、他業種ほど深刻ではない

にせよ、放送・テレビ業界にも影響はあるだろう。有力な会員予備軍であることは間違いあるまい。

また、今年は日韓中フォーラムのため「地域会員掘りおこし」事業を先送りしている。キーマンとなる地域幹事会員連絡会も構築し直さねばなるまい。まだ会のことは十分に知れわたっておらず、関心を示す地方局の人は多いという手応えは感じている。

楽天のTBSへの経営統合申し込みなど放送と通信の融合が近いと言われてはいるが、基本的には放送は公共性のある公文書発行であり、通信は井の中の蛙の私信交信である。

放送人は、ますます専門家であると同時に綜合人であることが求められてくる。現場は専門バカになり易い環境にある。同業他組織の人たちを沢山知る、刺戟をうける、発想の幅をひろげる。国際的にも同じことが言える。

放送人の会は放送人が井の中の蛙にならず綜合的専門人間になるために、まことに恰好の組織なのだ。そのことをもっと自信をもって、ひろくPRすべきであろうと思っている。

鵠沼海岸から ⑱

名誉会長　川口幹夫

三年前に右目の白内障手術をして「これで視界良好！」と喜んだのに、ことしは一月からずっと左目がかすんでいた。左右の視力が違いすぎて読書など最もこたえる。少々の不便なら「我慢、我慢！」と自分にいいきかせてきた。そこへNHKの不祥事である。

出身者であり、責任者であった身には特にこたえる。悶々としているうち、に左目がどんどん悪くなった。眼科に行くと「左もやりましょう！」

十一月四日、手術した。

あくる日、眼帯を外しに来た看護士さんが「あら、アラ」という。鏡にうつった自分の顔はさながら四谷怪談の「お岩さん」だ。

医師が来て「あ、アレルギーが出たね！」。私は子供の頃から強いアレルギー症なのだ。それがモロに出た。ウロウロする私に医師はこともなげに「手術はうまくいっているから腫れは二日目には収まる。心配するな」と言う。

ことば通りに三日目に腫れもひいてきた。久しぶりに気兼ねなしに本が読める！

体のことはかくして心配はなくなった。放送界はどうなのだろう。

NHKの方はまたまた大津の取材記者の放火事件で大揺れである。TBSの株にからまる話は、ほんの少し収まったようだが、サテ、これからどうだろう。デジタル化の話もこれからだ。

七十歳をこえてから私の身の上に起こった数々の事件、事故のことを思うと八十周年をへた放送界も、これからまだ続々と事が起こる気がする。

放送の世界は寸時の停滞も、後退も許されぬ世界だ。特に現代になってからは、人間の生き方にとって、欠くことの出来ぬ存在になったように思われるから、ちょっとした事が大きなモツレを引き起こすのだろう。

私などは、テレビ発生のころに立ち会ったいわば「中生代」の生き物だから、昔と今の狭間で生きたようなものだ。動物や植物もそれぞれの時代に起こった激しい変動の中を自らの姿を変えてまで進化を続けて、のりきってきている。

今、私が会長をしている「NPO」で「ファーブル昆虫記」というミュージカルを公演している。

これを見ていると、虫の世界はそのまま人間の世界だ。ファーブルが虫たちを見た目で、放送人たちも「放送」を見る必要があるのだろう。

◆「名作の舞台裏」　決まる◆

・第12回　11月21日（月）13・30～
「anego～アネゴ」（日本テレビ）
ゲスト　篠原涼子
中園ミホ（脚本家）
櫨山裕子（制作）
司会　石橋　冠

ヤブニラ見所＝半信半疑で「残りものに福」を待つ都心のキャリア女たちを半マジに描いた連続ドラマ。彼女たちが毎回立ち飲み屋で情報交換する。そのOL風俗が新橋など盛り場では目下大フィーバー中である。

・第13回
「白い巨塔」（フジテレビ）
（開演日は現段階では未定。追ってお知らせいたします）

ヤブニラ見所＝医は仁術か算術か、はたまた誤診を隠す忍術か。大学付属病院の権力闘争をロマン・ポリチカとして堪能できる重厚な複合ドラマ。

・第14回　06年2月5日（日）13・30
「おしん」（NHK）
ゲスト　小林綾子　伊東四朗
江口浩之（演出）
岡本由紀子（制作）
司会　荻野慶人

ヤブニラ見所＝（「テレビアの泉」）＝大根めしの作り方は戦時中の「今日の料理」第一回目の（もちろんラジオ昭17年）のテーマである。また「おら、負げねえど！」はアジア各国の自国語でも大いにはやったフレーズの由。

中・韓両国代表からのメッセージ

中国電視芸術家協会
代表団一同

5回中・日・韓テレビ制作者フォーラムは、大きな成功を収めることができました。私たち代表団は誰もが、今回のフォーラムのテーマ「家族」は、中国、日本、韓国のテレビ制作者に格好の話題を提供したと考えています。というのも、中日韓三国では、「家族」は共通して注目されており、試写会での「家族」を題材にしたドラマ作品はお互いの共感をよびやすく、コミュニケーション上、多くの話題を提供してくれました。番組の試写ならびに制作者とのシンポジウムは大変有益であり、制作者同士の相互理解を深め、将来、共同制作実現のための土台が作られました。そして、これからの番組共同制作に対しては、更なる検討が必要であり、ふさわしい環境を作り出していくことが必要と確認されました。

今回のフォーラムは、大変秩序のある運営でした。中国代表団は、日本の「放送人の会」が今回のフォーラム開催に尽力されましたことに対し、ここに感謝の意を表します。

組織委員会・常任委員長
DOCUSOUL代表
鄭　秀雄

済州島と揚州の大会はスケールが大規模で印象的でしたが、東京大会は前回と比べて質の面ではるかに高いシンポジウムでした。特に実行委員たちの組織的な、また献身的な努力はとても印象深いもので、まるで我々のフォーラムの模範答案を見ているような気持ちでした。もちろんいくつかの意見もありました。例えば、個人交流の時間が少なかったとか、試写会をジャンル別に分けたら、とかがありました。我々のフォーラムがより豊かに発展できるよう期待する声がより大きく聞こえてきております。皆様本当にお疲れさまでした。来年、ソウル大会も成功できるよう頑張りましょう。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

韓国放送プロデューサー連合会会長
李　康縣

今回の東京フォーラムは完璧な事前準備、緻密な進行と実行委員たちの積極的な熱意が発揮した大会だったと思います。開催国の皆様に感謝いたします。

会員・関係者から

謝謝・カンサハムニダ
山田　尚

フォーラムが終ってちょうど一週間の十月二十一日、中国電視東京事務局の張素美さんに電話すると、「王占海さんたちも、今日から出社したと連絡がありました」とのこと。フォーラム終了後、関西方面へも足をのばしていた中国の一行もやっと中国に戻った。

＊

日韓中のテレビ制作者が集うこのフォーラム。昨年の中国、揚州の大会の規模に、次期開催国としてショックを受け、手帳を見ると、帰国直後の昨年十月には、もう会場探しを始めている。

様々なイベントや、観光旅行が一年で最も集中するというハイシーズン。予算の目途も全くない状況だったが、とりあえず、続々押さえにかかる。

そして、資金集めと運営母体作り。主催団体として、放送人の会を核に、放送番組センター、放送批評懇談会の三者でフォーラム実行委員会を構成。放送文化基金、国際交流基金などの助成、役所等からの後援を申請、そしてNHK、民放問わず、放送界全体からも幅広く協力を得ることができた。

この間の大山代表幹事の、フォーラムへの思いと、手間をいとわぬ行動力が、全てを動かしたといって過言ではないだろう。ご心配いただいた資金が何とかクリアできたのも、大山代表をはじめ、放懇の田代氏、インタービーでもお世話になっているNPOの大山氏のスポンサー集めのご協力に負うところ大。感謝です。

さて、直前の小泉首相の靖国参拝にはドキリとしたが、大きな影響もなく、韓国、中国からは「冬ソナ」のユン・スクホ監督ら五十四人が参加。

「家族」と「共同制作」がテーマの作品も各国四作品、計十二作品が、制作者と共に参加。三日間、びっしりと詰まった日程にもかかわらず、鑑賞、質疑応答、シンポジウムと、当初の予定通り、とりあえず…無事終えられた。

その大きな要因の一つが、同時通訳の能力の高さと、三ヶ国語を話せた留学生の存在。プログラムから会場まで「全てを三ヶ国語で」が、このフォーラムのキーワード。

留学生たちは、NHK・PD時代の当初からこのフォーラムに参加されている原田令嗣代議士の紹介から。中国、吉林省の延辺自治州や黒竜江省などのいわゆる朝鮮族で、日本の大学院に留学している学生たち。五月の予備会議から協力を仰ぎ、当日には、上智大の音好宏教授の紹介も含め計十九人。韓国、中国の一行の最終日の新宿、

秋葉原での買い物まで面倒見てもらう。中でも李成日氏には、資料の翻訳、作成から会場の掲示物まで、果てはスタッフと一緒に泊り込み、三カ国のイベントとしての体裁がとれたのも彼のお蔭。

お蔭と言えば、忘れられないのが会場の日本青年館の町田副支配人、運営のワンズハートの森氏らのご尽力。

＊

最後になりましたが、実行委員を引き受けてくださった方、熊本で作品の翻訳、ダビングして下さった方、参加、ご協力いただいた方、改めてありがとうございました。そして、三カ国の皆さんにカンサムニダ、謝謝、感謝です。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

翻訳作業てんまつ記

村上　雅通

「熊本でやれば東京の半額程度の経費で出来る」と気軽な気持ちで申し出た翻訳作業ですが、いざ取りかかってみると問題山積でした。集まったＶＴＲは三カ国で十二作品、それぞれの国の言葉への吹き替えは二十四通りになります。日本語―韓国語、日本語―中国語の翻訳者は手配できたのですが、韓国語―中国語の翻訳が出来る人材が熊本では見つからなかったのです。このため、一旦日本語に訳したものを更に翻訳するという手間を取らざるを得なくなりました。出品作は、いずれも各国選りすぐりのものばかり。微妙な表現の違いは許されません。しかも、その翻訳作業が二段階で行われるのですから、日本語への吹き替えは慎重に慎重を期しました。

そんな中で最もてこずったのは、日本からの出品作「山小屋カレー」で、番組内に出てくる老夫婦の三重県なまりの会話は日本人でさえ聞き取りづらい内容です。ましてや日本人でない翻訳者に理解できるわけがありません。このため、老夫婦の会話をまずは文字におこし、さらにそれを標準語に直したのです。ただ、標準語に直したものを韓国語、中国語にしても果たして制作者が意図したものが正確に伝わるのかという不安が残りました。

かくして、吹き替え、音ミックス、ダビングに十四日を要することになりました。一方、十月七日から二週間のスケジュールでブラジル取材が入ったため、九月中には作業を終える予定だったのですが、中国からの作品の到着が大幅に遅れ、結果的には私がブラジルへ出発した後にも翻訳作業を行うことになってしまいました。スケジュールをやりくりして対応してくださったミキサーの竹原さんと2人の翻訳者には多謝です。

また、吹き替えのセリフを男女に分けるという当初の計画も、経費などの都合で実現できませんでした。

ブラジル取材を終え帰国したのはフォーラム開催の前日でした。果たして吹き替えは上手くいったのか、恐る恐る視聴室を覗いてみると何とか意味は伝わっている様子。一番気がかりだった「山小屋カレー」の部屋では、お年寄りのユーモラスな会話に韓国、中国の参加者から笑いもこぼれ、胸を撫で下ろしました。

ところで、今回のテーマ「家族」について、かつての参加者から「なぜ靖国問題を取り上げないのか」という指摘がありました。実は、中国が参加した第三回のチェジュ島フォーラムで「歴史、政治、社会問題は取り上げない」という申し合わせがあったのです。社会主義国中国の事情に配慮した措置ではありますが、我々テレビ制作者だけでも三国間の課題を真摯に語り合ってもいいのではないかという思いも他方にはあります。事実、中国の参加者の一人は「是非、日本人制作者の歴史認識について語りたい」と言っていました。

言葉、政治体制、歴史観の違いという難しい課題はありますが、いつの日かそれらの壁を乗り越えるフォーラムに醸成させたい。そんな希望を抱きながら、来年の韓国での開催に思いを馳せています。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

フォーラム参加番組の視聴会を横浜・放送ライブラリーで開催

放送番組センター・実行委員

筧　昌一

今回の東京大会のテーマ「家族」と「共同制作」の日本、韓国、中国からの正式参加番組十二本の『日韓中の制作者が描いた〝家族〟番組視聴会』を放送ライブラリーで開催した。期間は十月八日からフォーラム開催の前日の二十日まで。これは実行委員会から一般の方々にも韓国、中国の最新のテレビ番組をご覧頂きたいとの要望で実現した。新聞や広報紙などで紹介された効果もあって、参加者が三十人近くの回もあった。韓流ブームの影響か「韓国ドラマには誰が出ているの」との、中年婦人の問い合わせも数本寄せられた。

シンポジウムや番組鑑賞会の上映部門のお手伝いの中で、期間中に二つの出会いがあった。一つは、フォーラムの立案者である鄭秀雄氏。鄭さんは、ＫＢＳを辞めて日本の番組制作を学ぼうと、私の前職である放送番組センター（代表・牛山純一氏）に、一時所属していた。下宿先のお世話に始まり、仕事での関係など懐かしい思い出だ。二つ目は、日中テレビ祭（牛山氏が企画・運営した日本と中国の放送人交流の元祖）で、中国側の受け入れ機関であった中国テレビ芸術家協会の方との再会。約二十年前の中国訪問時

の感想と、この間の驚異的な進展を痛感したフォーラムでもあった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

送迎・再会・政治

明神　正

まず私は、スタッフの一員として初日に中国代表団を成田空港に出迎えた。この日到着したのは二十人で、半数以上が初めての来日。このため空港から都心に向かうバスでは、添乗員役を務めることになり随分慌てた。

バスのマイクを握って冒頭に、中国の有人宇宙船「神舟六号」の成功に祝意を述べると、総立ちで拍手をくれた。国威発揚を象徴する宇宙船は四日前に帰還したばかりで、中国人の興奮ぶりが理解できたように思う。

二つ目は、今回のフォーラムを機会に十五年ぶりに再会した人がいたことである。その人はソウル大学名誉教授の李相禧先生。平成二年、ＮＨＫとＫＢＳで日韓両国民の生活時間の比較調査を実施することになり、李先生には随分ご指導を頂いた。李先生はその時にも、流暢な日本語で日韓放送人の積極的な交流の必要を強調しておられた。

三つ目は、最終日のパーティーで、中国代表団の数人に敢えて歴史認識の問題を聞いたこと。異口同音に「これは政治の問題ですから」という答えが返ってきた。残念ながら、その答えの背景までは聞いていない。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

コトバの壁・司会者雑感

露木　茂

今回のフォーラムでは総合司会を担当した。日韓中国語が交互に飛び出す錯綜した場面は、すばらしい同時通訳のおかげで何とか切り抜けることができたが、よく考えてみると隣国同士で全く言葉が通じないということはどうみても不都合だ。打ち合わせでは結局カタコトの英語を使うことになる。

三カ国の人間が、借りものの遠い国の言語でしかコミュニケーションをとれないというのはさびしい限りだ。

国会でも、新人類議員が多数当選し、英語が達者な議員も増えた。欧米人とサシで対話のできる人達も多い。しかし中国や韓国にでかけた際のテレビ映像では、例外なく通訳を介した会議の映像が紹介される。「東アジア共同体」構想などということが語られているが、こういう光景を目にすると絵空事に思えてならない。我が身を棚に上げての話であるが、次の世代にはぜひ考えて欲しいことである。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

人生須らく痕あるべし

川口　健一

現在、韓・中両国は放送や映画・インターネットを中心としたメディアを重視した国家戦略のもと、活発な国際外交を展開している。こうした影響下にある立場も会員数も圧倒的に違う両国の放送人会と日本の放送人の会が、言葉の壁を乗り越え制作者同士の純粋な交流を実現して無事フォーラムを成功に導いたのは、代表をはじめとした関係者の方々の身を粉にした懸命なる一年間の努力の成果であったと思う。私自身は事前準備をほとんどお手伝いしないまま当日運営に参加することになりろくな働きができなかったが、日韓中制作者同士のパイプがより大きく広がったことを実感できたことは何よりの収穫であった。放送人の会にとって「人生須らく痕あるべし」という福沢諭吉翁の遺訓の通り、何かが残ったことは確かなようである。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

雑感・三つ

今野　勉

シンポジウムの司会を終えて感じたことが三つある。

ひとつは、日韓中の間の濃淡である。日韓の間の交流経験は、このところ急速に厚く深くなっている。その分、制作者同士の発言も率直で、問題も多様な広がりをみせていた。それに比べれば、日中の発言は、正直に言ってまだ深まっていない。

二番目に感じたことは、制作者個人の立場と国家や民族との距離のとり方の問題である。

韓国の鄭秀雄さんは、自分の制作者としての立場を〝宇宙から来たスパイ〟と紹介して、会場を湧かせたが、彼のいう宇宙とは、個人個人の良心である、と解説されてみると、問題は単なる比喩では終らなくなった。個人の良心に従うことと、国家・民族の立場は必ずしも両立するとは限らない。個々の制作者が問われた課題である。

三つ目は、番組というものは、必ずしも、友情や友好を前提にして作られるものではない、ということである。作品の持つべき苦さや毒は、交流・友好のために棚上げされていいというものではあるまい。そのことを胸において、今後の共同作業なり、交流番組なりを進めていくことが、重いけれど、制作者として大切なことではないかと思った。以上、司会者としての雑感三つである。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

日韓中テレビ制作者フォーラムに参加して

河野　尚行

中国のドラマ「姑」の主役・お婆さん役と、韓国のドラマ「ごめん、愛してる」の脚本家が共に、その道の〝プロ〟ではなかったという話を、それぞ

れの番組制作者から聞きました。それが強く印象に残っています。お婆さんの存在感とシナリオの新鮮さの裏付けです。この二つの番組は視聴者の心をしっかり掴みました。日本ばかりでなく、韓国でも、いまや中国でも、かつて社会を束ねた力が神通力を失い始めました。世の中が大きく変動し、人間がそれまで定着していたポジションから離れ、浮遊しはじめました。家族の中でも外でも、そうです。そんな時代、人間と社会を見つめるテレビの表現者にも、安易なマンネリズムは許されず、新しい工夫、新しい挑戦が絶えず求められています。

このフォーラムはそうした時代の要請に応えるものに成長しつつあります。日韓中、それぞれの国のＴＶ制作者が国のワクを超えて刺激しあう、現場感覚に溢れたこのフォーラムに参加するのは楽しくもあり、歴史背景の違いから緊張感もあり、なかなか魅力的でした。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

韓国語視聴会を司会して

石井　清司

開会直前の青年館入口内フロアは、多岐の顔ぶれが旧交を暖めるちょっとした熱いサロンと化し、この企てが〝人間フォーラム〟である実感を得た。スタッフの眼の疲労とは裏はらにその心の余裕にさすがと思った。

中国作品「我がパパ、ママ」の韓国語視聴室の司会をやった。中国語映像に対し韓国語スーパー、その部屋にきた三十人ほどの人たちはみな韓国スタッフ。日本人が一人も見当たらないので慌てた。まるで海外の空港でポツンと置き去りにされた気分だ。

とりあえず制作した浙江省電視台の女性ディレクターのことを日本語で紹介。日本語から中国語、ついで韓国語とリレー通訳される。彼女の局のある浙江省の首都杭州市へ行ったことがあったのでこれが天の助け。詩に詠まれて有名な西湖や土地の印象などを話し、部屋の気分をほぐしてもらう。

ただし視聴後の討論は白熱そのもの。歴史的背景が不足ではなど韓国側の質問に、彼女の対応は堂々と光った。あと五分、あと一分とぎりぎりまでやり、それでも彼女を囲んでつづく。それにも立ち会ったが、後のいい交流が予感できたので、散会を促した。突然の頼まれ進行だったが、制作者の心はひとつ、を感じた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

素敵な俳優・制作者

坂元　良江

ブームとしての韓流にはあまり関心はなく、「ヨンさま」のどこがそんなにいいのかしらと思う私が、今回見せていただいた韓国のドラマ「ごめん、愛してる」の主演俳優の鮮烈な魅力にはすっかりまいってしまった。東洋人らしさに加えて東洋人離れしたのびのびした風貌、白人の中での圧倒的な存在感、おおらかな演技にしばらくは呆然としていた。俳優に象徴されるようなエネルギーを作品そのものが持っていたといえるだろう。

三日間のフォーラム開催中、わずか一日半しか参加できなかった私に何も語る資格はないと思いつつも、短い時間に見たいくつかの番組、韓国、中国の制作者から聞いた話は大変興味深いものだった。中国のドキュメンタリー「我がパパ、ママ（原題「俺爹俺娘」）のディレクター韓蕾（ＨａｍＬｅｉ）さんの具体的なテーマをあげてのドキュメンタリー番組合作の提案には興味を引かれた。残念ながら直接個人的にお話をする機会はもてなかったが私にその気があれば連絡をとる方法はあると思いつつ、作品もその後のお話も驚くほど饒舌だった彼女の迫力に私は到底拮抗できないな、と弱気になっている。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

追い越されるなあ

堀川とんこう

驚くべきは、数年前に比べて、韓中両国の番組に距離を感じなくなっていたことだ。テーマ、脚本、演技の質。違和感どころかむしろ同質感を感じて不思議な思いさえする。両国は日本に接近したのか。それとも国際化したのか。日本のテレビドラマをたくさん見て勉強したから、とスタッフは言う。

『姑』（中国）の俳優たちの演技に特別の感慨があった。これまで力強く分かりやすいけれど、オーバーで照れくさい感じを拭いきれなかった演技がすっかり変わった。来年の自分の仕事に中国俳優が出てきそうだという事情もあり、李三林監督をつかまえて、あの自然な表現を引き出すのは大変なのか、と質問した。「今は簡単。もっと自然に、と言えば皆できますよ」といともあっさりした返事だった。

日本が経済発展の過程でゆるやかに体験した数々の問題を、両国が急激なスピードで抱え込んでいく様子が痛ましくも見える。世界で起こっている大きな変化の波は両国を等しく飲み込んでいく。情報化、グローバル化、マネー資本主義化。変化のキーワードは、誰も口にしなかったが恐らくアメリカだ。そうか、アラブ世界は、それに対してノーといったのか。参加を楽しみながらも、思いは拡散していく。

アメリカをテーマに両国と合作するときが来るだろうな。

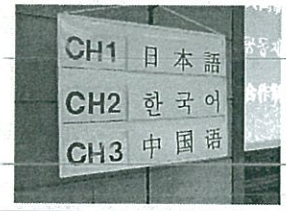
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

第5回 日韓中テレビ制作者フォーラム in Tokyo

日韓中テレビ制作者フォーラム
한중일방송프로듀서포럼
中日韩电视制作者论坛

2005年10月21日～24日

10月21日(金) 18:00 到着 → 開会式 日本青年館 3階 国際ホール



鄭 秀雄 常任委員長

大山勝美 組織委員長

志賀 信夫 顧問

参考 中国電視芸術家協会副主席

李康縣 韓国放送プロデューサー連合会長

村上光一 大会会長

総合司会
山本 美希 鈴木 旋

10月21日 19:40 歓迎晩餐 4階 宴会場 ～アルデ～

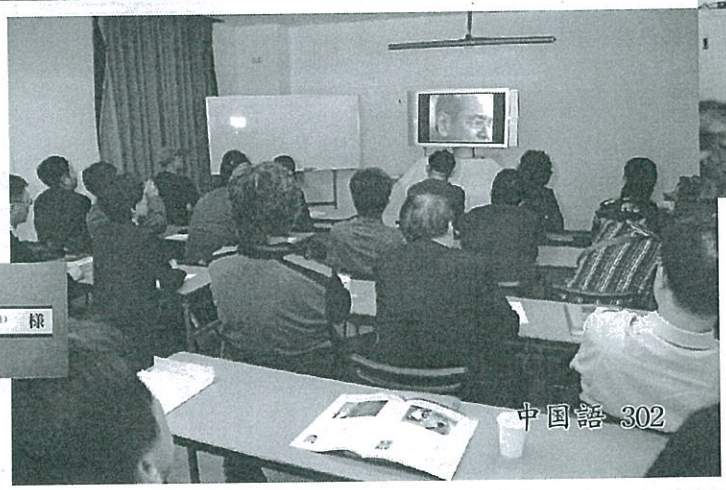
韓国放送人会会長 韓 鮮故（韓国）

特別顧問 川口 幹夫

10月21～23日　各国語別　作品鑑賞と討論

韓国語 304

石井 清司と番組制作者



中国語 302

参考作品鑑賞室 303

日本語 301

悲壮感漂う大会本部

3カ国緊急ミーティング

10月22日　記念写真等

6階レストラン志の朝食

韓国 KBS の報道取材班

第5回 日韓中テレビ制作者フォーラム in Tokyo
2005.10.22　於・日本青年館　国際ホール

10月22～23日　全体会議　於・国際ホール

同時通訳ブースより

総合シンポジウム「家族作品」

荻野 慶人　実行委員

放送事情
山田良明CX常務取締役

韓蕾（韓国）

李三林（中国）

藤井稔（CBC）

石丸彰彦（TBS）

総合シンポジウム「共同制作へ向けて」

共同制作事例研究

若泉久朗 実行委員　濱田勉彦 西日本放送

今野 勉　実行委員

日本委員　村上 雅通

日本委員　山田 尚

10月23日(日)　16:30　閉会式

司会トリオ
宋鈞強（中国）朴由敬（韓国）山本美希（日本）

感謝楯贈呈

記念品贈呈

日本顧問　河野 尚行

韓国顧問　李相禧

参加作品賞授与

北京中北電視芸術　有限公司
董事長　尤小剛

参加作品制作者諸氏

10月23日(日)　18:00　歓送宴会 ～ 祝賀演奏

日本諮問委員　原田 令門

オーケストラ・アジア・ジャパン

エピローグ

お疲れさま、学生通訳の面々

本部スタッフたちにもやっと笑顔が・・・

皇居前にて（韓国）

ソニー・ショールームを見学（韓国・中国）

撮影：横山　匡／伊藤 雅浩／磯村 健二〔兼編集〕

感想

各務　孝

今回の日韓中テレビ制作者フォーラムのメーンテーマとして取り上げられた〃家族〃の問題は普遍的テーマであるだけに、如何様にも料理できる反面、何を手がかりに描いたら良いのか、どのような基準で作品選定を行ったらいいのか、関係者には戸惑いもあったことと推察されるが、さすがに三国から寄せられた作品はその切り口、手法は多岐に富み、それぞれの制作者の資質やおかれた状況を鋭く、反映したものが多く、安直なホームドラマや〃心温まる〃ドキュメンタリーは少なかったように思われた。

従来、人々の価値基準の拠り所になってきた社会、国家、企業、民族などに最早、信をおけなくなった人々が最後の望みを〃家族の絆〃にかけている現状が今日の家族ドラマやドキュメンタリーの隆盛を呼んでいるのかもしれないが、今回出品された作品の数々はそうした安易な期待をむしろ、拒絶し、家庭の崩壊を仮借なく晒すことで、見る者に〃家族〃について、改めて、考えさせようとしているように見受けられた。その意味で、慾を言えば、各作品の映写会場での質疑応答だけでなく、全体会場に於いても、〃今、何故、家族なのか？〃をシンポジウムとして討論して貰えたら良かったと愚考した次第である。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

クリエイティブな発言を

磯村　健二

フォーラムの事務方を担当し、完璧とは勿論言えないが、何とか無事終えてホットしている。六カ国協議の裏方の困難さに比べるべくもないが、言葉や習慣の違いだけでなく、いかに複数国の会議の難しさを今更ながら痛感している次第である。

会議の内容的なことに関して言えば、交流の意義論はさておき、共同制作がある方向性に向けて進んだことは喜ばしい。しかし資金面、放送の形態などの具体的な方法論はこれからの問題であろう。

関連して一言。各国参加者の背景、環境の違いはあるが、制作のスペシャリスト達の会合であるにも拘らず、クリエイティブな発言が少なかったのではないだろうか？五回目とは言え、中国も含めての会合は日も浅く、互いの国の放送事情や制作環境を理解しあう段階に留まっている実情である。その意味において、日本の参加者のより積極的な発言、提案が必要なのではないか？例えば、共同制作に関しても、言語の壁を乗り越える方法論、演出論「翻訳スーパー、吹替えを必要としないインターナショナルな映像語法による作品」などにチャレンジする等。

我々「放送人の会」の中でも十分な議論を進めていかないと、ただ参加することだけの放送アジア大会になってしまうのではないか？

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

フォーラム雑感

長沼　士朗

日韓中テレビ制作者フォーラムに実行委員として参加して、その中で気付いたことを二、三記したい。

まず国際的な会議で必ず課題になる言葉の問題については、通訳の人たちの努力により、同通はかなりうまくいったように思われる。

反面鑑賞作品については、それぞれの番組に一ヵ国語の翻訳しかなく、三国の参加者が同時に同じ番組を見ることができなかった。この点では、鑑賞作品の数をもう少し少なくしても、番組を見終わった後に、三国の出席者でその番組について話し合える時間を作っても良かったのではと思った。

二十三日午前中のシンポジウムでは、鄭氏の「日韓は頭で考えると対立するが、心で考えれば歩み寄ることができる」という発言や、中山和記氏の「子どものころ朝鮮の子をいじめたお詫びとして、今韓国の人たちと仕事をしている」というような発言が、とくに印象に残った。

フォーラムの経験を今後につないで行くためにも、国内のテレビ制作者向けに、放送人の会としてその成果を示して行くような活動、例えば具体的には鄭氏や村上氏の作品の上映会というような取り組みが、これから必要になってくるのではないかと思う。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

舞台裏・大衆の目線・名刺交換

寒河江　正

フォーラムが終って、改めてスタッフ担当表をみる。

【本部、進行、フォーラム、各国語試写、技術、通訳、送迎、受付、ＶＩＰ、広報、ＮＨＫ収録、写真、ビデオ、ケータリング、会計、見学、中国幹事、韓国幹事、ワンズハート】

実行委員（複数）の活動は六月六日、会場になる日本青年館ホテルの下見から始まった。「中国側二十八名（当初）は全員個室を希望、十月二十一日は既に予約が３Ｆに…」会期中貸切とは言わないまでも…　初日から不安がよぎる。立会いのホテル側支配人Ｍ氏「うーん何とかしましょう」。この一言と、その後の親身な協力が実務作業をスムーズにした。

「フォーラム会場、作品鑑賞は３Ｆ、晩餐会は４Ｆ、朝、昼の食事は６Ｆ」

実行委員の役割が決まる。各自思い思いのイメージを描きながら実行に

向けてコラボレーションは続いた。当初から明確な方向付け（テーマ、家族）は決まっていたが、日韓中の文化の違いが微妙にあって、「接客―もてなし」に神経を使ったのは事実だ。開会式の初日、露木、山本両氏との打ち合わせに必要な、ＶＩＰの座席表一覧と正確な読み方を確認出来たのは開始十分前だった。終りに今回の実施には専門のワンズハートをはじめ外部からの強力な応援があって無事終了したと強調したい。長期にわたって運営の実行指揮を務めて頂いた会員のＹ氏、Ｉ氏に改めて感謝したい。

＊

大会二日目。フォーラムの生みの親、韓国の鄭秀雄氏と午前二時半過ぎまで酒を酌み交わす。私は北朝鮮からの引揚者、自己紹介から始まって、卒業した大学の門に若くして獄死した韓国の詩人の胸像があるなど個人的な話を交え、更に鄭さんの制作論なども伺った。

最後は、酔いの気分と震える手でもう一度二人は名刺を交換した。「今回、韓国の制作者は全員五十枚の名刺を持ってきました」「そう、私も実行委員の名刺を五十枚持っています。こうして二人で向き合って話をすれば尽きないね…」。

その時私は、参加した制作者が車座になって語り、本音で言い合う時間と場がフォーラムに必要だと思った。五十枚の名刺の交換、若いボランティアの同時通訳を交えて。次回開催の幹事国は鄭秀雄氏が主催する韓国だ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

アマチュアカメラマンの国際舞台

荻野　慶人

「ＤＶカメラマン」これが僕の任務であった。五月の「放送人グランプリ贈賞式」での遊びが認められたらしい。

今野勉さんの司会で各国の敏腕プロデューサーたちが激論するシンポジウムはＮＨＫが収録するが、三日間の全記録はアマチュアの僕の一手にかかる「放送人の会」らしい成り行きだ。

カメラ二台は三脚に据えっ放しでスタートボタンを押すだけ。一台を手持ちで動き回った。時々固定カメラのサイズを変えたり、テープ交換にも忍び足する。会場のリアクションを撮ろうとして「写っちゃうんですけど…」とＮＨＫのスタッフに叱られ、プロの報道マンには見えないのだと悔しい。

三台だから重複はするが、80分テープ二十一本で二十八時間の記録は自慢したい。

スクリーンに映写された感動のシーンも鮮やかに撮れている。穏やかな素顔が一変する迫力の鄭秀雄さん（韓国）や村上雅通さん（日本）、佳人の韓蕾さん（中国）…他、同時通訳のイヤホーンを耳にできない僕は日本語以外皆目解らないが、熱気には圧倒される。

さて、どう編集するかで今は呆然と立ち尽くすのみ。二カ国語の通訳が入るスピーチでは壇上の主人公も持ち時間の三分の二は立ち往生している。

フォーラムに参加できなかった人々に、あの活況の臨場感を伝える妙案を夢の中でも考え中である。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

裏方私語

鈴木　典之

実施体制の組み立てから、あれこれ提言させてもらったが、結局は（予想通り）一部会員の犠牲的奉仕に偏らざるを得なかった。この点が、これからの会運営上の基本的問題として残ったように思う。ここをキチンと総括しないと、会は早晩空中分解するのではないか。小生個人としては、準備のヤマ場で約一ヵ月戦線離脱したことを申訳なく思い、山田・磯村両氏はじめスタッフの全力傾注に深甚の謝意を呈するほかない。

初日の朝になって受付担務を頼まれ、会場で参加者用資料揃えに入ったが、文字通り一刻を争う綱渡りの作業になった。韓・中代表団の空港からのバスが事故渋滞に巻き込まれて一時間延着しなかったら、受付は間に合わなかった。渋滞ママで、出迎え役の明神氏から途中連絡が入った時は、心の中で手を合わせた。今思い出してもゾッとする。

去年の中国開催に較べて見劣りすることを怖れたが、顔見知りの韓・中幹部が「気にならない」といってくれて、安堵した。それだけに、最終日の議事の盛り上がりはうれしかった。留学生の通訳たちとは、全員と言葉を交わし、その都度気配り上の注文も付けたが、皆いっぱしのエリートなのに素直で折り目正しく、好感を持った。韓・中の次世代、恐るべし。

終った途端、正体不明の風邪で寝込んだ。熊本放送・村上氏が前日ブラジルから持ち帰った南米の風邪まで受け付けてしまったのだと、密かに思っている。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

″天″はテレビを見捨てなかった！

田原　茂行

私はこの数年、テレビの陥った閉塞状況を見つめ、拙著「視聴者が動いた　巨大ＮＨＫがなくなる」で、メディア全体の改造案を提起しました。それを支えてくれたのは、全国の地域局の番組の理念と実績でした。今回、韓中の多数の参加者の迫力の漲るフォーラムに出席し、その起点が、地域番組制作者のもつ広い視野と国

を越えた制作姿勢であることを知り、目の前に新しい光がさした思いでした。

テレビの閉塞状況の一つは、内向き性・ドメスティック性にあります。航空事故では日本人の安否がまず報じられ、世界数億の飢餓を他所に大食い番組を放送します。国際取材の珍しい映像や実情は、国内の現実と切り離されてドメスティックな消費財となります。

しかし日韓中の制作者の描いた同じ主題を見る時に、お互いの映像がドメスティック性を越えた意味を照らし出し、深い意味を引き出すことを体感できました。韓国の家族の泣き叫ぶ姿を見て、〝泣き〟と〝笑い〟を主題にした連作を見たいなあ、と思いました。

かつて「二十四の瞳」をみた中国の観客は、その泣きのシーンで笑ったというのは有名な話ですが、さて今は？

「放送人の会」を軸に放送界がまとまり、テレビの宿痾を切り開く突破口となるフォーラムの成功に対し、全関係者と〝天〟に感謝したい気持ちです。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

どの国の女性が強い？

伊藤　雅浩

私はスチールカメラの担当でしたが、カメラマンはあちこちに顔を出すかわりにそれぞれの場面には細切れにしか付きあえません。細切れの時間の合間に通訳の若い女性と会話を楽しみました。

私「留学生は就職も考えるでしょう。女性差別はありませんか？」

韓「はっきりあります。悔しいけど。」

中「中国にはありません。」

私「日本には男女雇用機会均等法という法律はありますが、女性差別はなくなりません。」

韓「就職に関しては中・日・韓の順で女性は強いのですね。」

私「家庭内ではどうでしょう？」

韓「夫婦喧嘩で韓国の女性は絶対男に負けない。」

中「中国の女性は夫と喧嘩しません。」

私「それは信じられないけど、争いごとがあれば女性が譲るんだろうね。私は妻に喧嘩で勝てない。」

中「喧嘩が強いのは韓・日・中の順ですね。」

韓「でもお金を握っているのは断然日本の女性。夫の収入を全部自分のお財布に入れてしまうんでしょう？」

私「そんな家庭は多いね。」

中「中国では財布は別々です。」

韓「韓国では夫が握っているのがほとんどだと思う。」

私「お金では日・中・韓の順ですか。これからどうなるでしょう？」

韓・中「順序はどうなるか分かりませんが私達女性はもっと強くなりますよ。」

皆さんのご意見はいかがですか？

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

最後に…一老翁のつぶやき

松尾　羊一

閉会パーティーのおり、会場を眺めてつぐづく思った。「中国、韓国側の制作者たちの若さに比べ、日本側のなんとジジイ臭いことよ」

放送人の会の組織構成上無理もないのだが、できれば在京局、制作会社から「お若いの」や、各局の契約社員になっている在日中・韓国系の現場人たち、またメディア学者たちにも出席して欲しかった。クローズな集まりとはいえ、そのあたりの気配りが不足していた。反省しきりである。

次の日本主催（多分08年）は、われらは老いさらばえ、次世代放送人たちの出番だろうが、その折は会場はフンパツして帝国ホテルで（マサカ！）コンテンツ売買の瀟洒な「商談コーナー」も設営し、契約書が乱れ飛ぶ…夢である。

もちろんわれわれは退場し、次世代の幹事諸君が全国区的になって放送界を睥睨しているはずだ。彼らはどんな形で開いてくれるだろうか。楽しみである。

ま、その頃までこっちが馬齢を重ねていれば、の話だが。

InterBEE2005　公開シンポジウム

日　時・十一月十七日(木)午後三時～五時半
場　所・幕張メッセ国際会議場2F・国際会議室
パネリスト・神保哲生(日本ビデオニュース代表)
　　音　好宏(上智大学・教授)
　　下重暁子(作家)
司　会・今野　勉(放送人の会)

今回はじめて「ジャーナリズム」をとりあげる。放送と通信（インターネット）の関係にまつわる話題が熱いいま、語られるべきは、放送とインターネットにおけるジャーナリズムのありよう、その可能性、相互の関係、将来の展望ではないか。「ジャーナリズム」の視点から見たとき、放送と通信は融合できるのか、それぞれの機能は何か、その機能はどのような社会うお生めるのか、放送人の、ネットユーザーの立場から、そして市民の立場から熱く深く語り合う！　（開催日が迫っています。よろしく）

放送人の証言 12
匠の人びと（その二）久野浩平

今回は技術、カメラ分野のスタッフにしぼり、の後さらに追加取材した方々の「証言」を集めてみました・・・

◇　◇

石川健次郎 さんは、初期のＮＨＫ技研を知る数少ない一人です。テレビ要員として石川さんが技研に入所したのは一九四九年で、占領軍により禁止されていたテレビ研究がこの年解除になったからです。石川さんの「証言」は当時の技研の組織、ＮＨＫのテレビ開発の中心はアイコノスコープだったこと、そして五一年、ＮＴＶが予備免許で先行した折りはアメリカ流の標準方式が採用された結果、技研はそれまでの研究成果を一切放棄せざるを得なかったのです。その苦悩を語ります。

また永山弘、梅本重信、石川甫たち当時のディレクターの思い出、映画から移ってきたカメラマンと技術出身のカメラマンの混在、照明や装置、メーキャップの研究など、ＶＥ、カメラマン、スウイッチャー、遂にはＰＤも経験した石川さんの話題は豊富です。

「トランジスタが出来たことですっかりテレビの機械が変わっちゃったでしょ、いまのハイビジョンに至りましてね、でも比べて映像ってものがこれでいいのかどうか、映像ってものの力がね、もっと教育面とかでも活用さていいんじゃないか、よくそう思うことがある」

次ぎは **村主彦** さん。ＮＨＫ初期の名カメラマンで東宝、東京映画を経て五三年、テレビ開局直前のＮＨＫに入局、試行錯誤の混乱の中で映画出身のプロのカメラマンとして数々の大作をこなすと共に後輩の指導に当たりました。村主さんの「証言」には、不安定だった当時の器材のこと、映画のセットと異なるテレビスタジオの雰囲気、五九年には皇太子ご成婚パレードに先立つ賢所の式典をモーニング姿で代表取材撮影したエピソードなどが語られています。「花の生涯」「赤穂浪士」「源義経」など大河ドラマでのカメラワーク、熟練した映画の特機班とロケーションで協働した時の満足感など、穏やかな語り口の中に映像への愛情が溢れる村主さんの「証言」です。

「これまでテレビはロングはダメだって言われてきたけど大画面時代になったらロングショットを効果的に使うのがいいんじゃないかと。大事に撮っておいて、ここぞという時にパッと見せる。そういうテクニックがあると思う」

木村忠夫 さんは四五年、復員と共に大映に入社、その後フリーを経て五四年テレビ開局を翌年に控えたラジオ東京（ＫＲＴ　現ＴＢＳ）に入社。村主さんと同様、映画のプロ出身のカメラマン。木村さんの場合は、放送と関係する以前の破天荒な人生に驚かされます。終戦時は本土決戦の小隊長としてクーデターを企て失敗、割腹自殺を止められ未遂に終わった話、戦後は婦女暴行しようとした米兵を殴り、占領軍の刑務所に収監されたといいます。

「カメラマンとしての仕事は『日真名氏とび出す』『東芝日曜劇場』『慎太郎シリーズ』など、岡本愛彦、大山勝美、実相寺昭雄たちと組んで前衛的なカメラワークを試みました。剣ヶ岳の頂上からロープで吊り下がって撮影したり、華厳の滝をこれまたロープに吊られてトラックダウンしたり」

命懸けの仕事はまさに、快男児木村忠夫！の面目躍如です。

「キャメラとか機械の操作なんてのは、ある程度覚えちゃえばいいが、その先の応用をうまくやるためにはやはり演出力が必要なんだってことが分かってきたんでね・・・」

岩崎英雄 さん。四一年ＮＨＫ浜松局入局。翌年ＡＫに移りスタジオ技術者になります。戦時中の放送現場の状況、海外放送、ラジオ体操、捕虜たちが故郷に向けて発信したメッセージやジャズ演奏などの対敵放送、東京ローズの思い出など、この時期についての岩崎さんの「証言」は貴重です。

戦後四七年ごろから米軍の指導下に新しいラジオドラマが興隆します。ドラマミキサーとして岩崎さんに活躍の時期が・・・「鐘の鳴る丘」「桜んぼ大将」「君の名は」と続く菊田一夫さんとの仕事の思い出。五三年「流れ」も菊田さんの作品ですが、それは隅田川の川舟の上での日本初のオールロケによるラジオドラマでした。

「（真知子が）ちょうど新潟港へ行くわけですよね、それがまた冬なんです。シベリア風は吹いてくる、当然波は高いはずだ、エンジンの音で船上は揺れてるはずだ、と（菊田）先生は言うわけ。そこに高い波が船上ををだあっと流れて行くんだ。だからまともなセリフじゃない、と（中略）だからまずものすごく分厚い効果音になった。『君の名は』で一番苦労しましたね」

最後は **菱田市彦** さんです。五二年ラジオ東京入社し録音中継班。五四年、テレビ開局を前にテレビ局へ異動。そこでもテレビ中継班に所属。

「証言」は開局時の機材の説明の後、五五年四月世田谷体育館からの「開局記念歌謡ショー」にはじまり、芸術祭参加の中継ドラマ「人命」、ご成婚パレード、羽田沖全日空事故、七十年代に入ると衛星中継が盛んになり正月特番でのパリ、Ｎ・Ｙ中継、田中首相の訪中と続きます。菱田さん担当の中継番組を羅列すると時代の流れが鮮やかにうかびます。ハンディカメラが普及するとスタジオ班と中継班の職域が融合し、ＥＮＧの思想が登場します。

「ＥＮＧなんてのはずっと前から日本がやってるんですよ。火事だ地震だの事故現場の中継とか、つまり大きなカメラ持ってケーブル引っ張って、火事場中継するなんてアメリカあたりでは考えられなかったわけで。だけど日本は突撃精神でやってたんだ。スタジオでゆっくり使うカメラをまるで野戦兵器のように持ちだし、車につんでやって取材してきたんですよ、われわれは」

菱田さんの「証言」はテレビ番組の最も大きな柱の一つ、「中継」の歴史を物語りながらテレビの本質、思想をもまた語ってるように思えます。

テレビ裏方創世記 2

橋本 潔

1952年(昭27)7月、私は鎌倉材木座海水浴場の砂浜に座っていた。私の前には畑中庸生さん(NHKディレクター)とNHKのミキサーと、そのご家族が居られた。初対面だった。私は背広に黒短靴という姿で、あたりはみな海水着という状況で…

私は畑中さん(当時内田姓)に京都の撮影所での撮影現場のこと、東横映画が「新妻会議」のラスト5分を国産の小西六カラーカメラとフィルムで撮影(宮川一夫)したこと、当時のフィルムの感度が低いうえに、さらにカラーフィルターで3色分解するためまったく光量が足りず、屋内セットをオープンに建て、太陽光をベースに撮影部のレフを総動員、さらに足らない分はサンスポットを並べて使っていたことなどを話した。すると畑中さんも、NHK技術研究所でもいま、テレビ放送の実験で使用してるアイコノスコープカメラが同じように大光量を必要としていることを話された。畑中さんは東宝からNHKに移ってラジオの演出を手がけておられたが、日劇などの舞台経験を買われ、テレビドラマやショーの番組制作を試みておられた。

この実験チームでは、畑中さん以外は舞台や映画の経験がなく、とくに大道具、小道具の調達に悩んでいて、とりあえず畑中さんが美術も受け持っているとのことだった。別れ際に世田谷区・砧にあるNHK技術研究所のテレビ実験スタジオを一度見てみませんか、という話がでた。

当時、内幸町にあったNHK本館の南側、職員通用口の前から技研行きのバスが出た。砧といえば東宝撮影所や新東宝撮影所があるところで、技研にも興味はあったが、撮影所もあわせて見てみたかった。

1948年、NHKラジオの子供の時間で大評判だった「鐘のなる丘」を東宝児童劇団が上演し、その関西公演(NHK大阪、京都、神戸主催)の照明を私が担当していた。ところが東宝のストライキに遭遇、最後の神戸公演はスタッフの同調ストライキによって上演中止となった思い出がある。

なにしろ「来なかったのは軍艦だけだ」といわれた米軍出動で話題になった撮影所には黒沢作品「野良犬」のオープンセットを建てた場所をはじめとして大いに興味があった。

「砧通い」の連絡バスで三軒茶屋を過ぎるとあたりは一面の田園風景に変わる。青田の向こうに大きな木立にアンテナが立つ技研の風景は、油絵の題材に絶好のものだった。門を入り、広い並木の通路の右側にテレビ実験スタジオがあった。木造の屋根付き廊下に続く白灰色のモルタル壁のスタジオに入った。この日は実験放送の予定がなく、スタッフの姿はなかった。

スタジオは吹き抜け2階建て、130平方メートルの空間で、正面には厚地の無地カーテンが吊り下げられていた。それに対して反対側の2階には、ラジオスタジオと同じような副調整室のガラス窓、その前には手摺り付きのベランダが両サイドに伸び、そこには反射鏡付き213キロのサンスポットが2台ずつ置かれていた。床は一面寄せ木タイル張りであった。演技エリアは奥のカーテンから約3〜4前まで間口は約10メートルぐらい。この演技エリアに向かって吊り下げられている照明器具と電球は初めて見るものであった。岩崎電気が開発した製品「アイランプ」だった。このアイランプ6連のバンクライトが並んで吊り下げられた状態は葡萄棚を思わせた。床にはスタンド付きバンクライトが数台置かれ、その他に2キロのソーラーサンスポットが2台あった。寄せ木フロアーの上にはティーテーブルとその上に灰皿、煙草盆、向き合った応接椅子2脚、そのそばの花台には盆栽の鉢が置かれていた。あまりにもみすぼらしいセットで、当時の中学生、女学生演劇コンクールのほうがずっと舞台装置らしいものだった。すぐ隣の東宝撮影所で作られた黒沢作品の重厚なセット、新東宝の白黒の階調が美しい都会的なセットの画面の印象を思い出し、そのあまりの落差に呆然としたものだった。(つづく)

◆新刊紹介◆

「誰も『戦後』を覚えていない」

鴨下信一著(文春新書)

「戦後」とは「もはや戦後ではない」(昭31)あたりから定着した。だが、その前に「敗戦」後、朝鮮戦争(昭25)を境にして「終戦」後があったとし、「敗戦」「終戦」「戦後」をたくみに使い分け、「戦後60年」という雑な括り方で焦土と共に埋もれた真の戦後を数々のキーワードから明かす。砂山から錆びたナイフを発見したのは石原裕次郎だったが、錆びた言葉を「ジオラマふうに」紡いで復権させた書。(720E)

「巨大NHKがなくなる」

田原茂行(草思社)

鉄鋼、電力の解体を横目にこの巨大な組織は残った。田原はマンモスの足跡を外科医のように腐わけし、病巣をえぐる。といえば江藤文夫や「小和田次郎」、青木貞伸の衣鉢を継ぐ書と思いがちだが違う。伏魔殿ありき、問題ありきで読者を誘導はしない。田原は具体的な事例を自在に時代のイッシューにからめ包囲網を構築する。その文脈の根っこにラジオ時代の録音構成の手法を見てとったが、どうだろうか。(1600E)

「テレビは戦争をどう描いてきたか」

桜井 均(岩波書店)

テレビは「戦争をどう描いて」「何を描いてこなかったか」。それは「なぜテレビは戦争を描いてきたか」「なぜテレビは戦争を描いていかなければならないか」という映像メディアの覚悟に立つことにつながる——冒頭の桜井の言葉に、厖大な映像ドキュメンタリー作品史への長旅の理由がある。4000ページを越える大著は01年文芸編集者の現場から川西政明(河出書房)が『昭和文学史』全3巻を一挙刊行した際の文壇の衝撃を彷彿させる。(4200E)

「お前はただの現在にすぎない、テレビに何が可能か?」(萩元晴彦・今野勉・村木良彦 田畑書店)「実録テレビ時代劇史」(能村庸一 東京新聞出版局)を経て、この3書はもろもろの映像から陶冶された制作現場が血肉化した航跡である。書斎派や調査畑とはちがう、現場人による「野の学」(宮本常一)の輩出を喜びたい。(松)

会員名簿，05・11・14現在

（あ）合川明　青木裕子　赤井朱美
秋田完　新井和子　有馬哲夫（い）
石井清司　石井ふく子　石井彰
石高健次　石橋冠　磯野恭子
磯村健二　市岡康子　一色伸夫
伊藤雅浩　井上良介　岩澤敏
岩下恒夫（う）上田千秋　碓井広義
歌田勝彦　宇野昭　生方恵一
浦田彰（え）江口展之　遠藤利男
遠藤ふき子
（お）大蔵雄之助　太田敬雄
大西康司　大西文一郎　大原　誠
大原れいこ　大山勝美　大類　啓
岡弘道　岡崎栄　岡田晋吉
緒方陽一　岡村黎明　沖野　暸
荻野慶人　小田昭太郎
小田久栄門（か）加賀美幸子
各務　孝　片岡敬司　片島紀男
勝部領樹　加藤滋紀　加藤静夫
金沢敏子　兼歳正英　金平茂紀
加納孝夫　上安平洌子　鴨下信一
河合　肇　川口和久　川口健一
川口幹夫　川竹和夫　川平朝清
河邑厚徳　河村正一
（き）岸田功　北川泰三　北川信
北出晃　北村美憲　北村充史
木村栄文　木村成忠　木村忠夫
木元教子
（く）楠美昌　工藤英博　国枝忠雄
（こ）児玉久男　児玉孝光
後藤多聞　小中陽太郎　近藤晋
今野勉（さ）斎藤伸久　齋藤守慶
斎藤秀夫　斎明寺以玖子　寒河江正
坂元良江　桜井均　桜井元雄
迫田朋子　佐々木欽三　佐々木彰
佐藤年　佐藤利明　沢口真生
澤田隆治　沢田隆三
（し）重延浩　静永純一　渋谷康生
嶋田親一　島地純　清水　満
下川靖夫　下重暁子　習田豊
城菊子（す）菅野高至　杉澤陽太郎
杉田成道　鈴木昭典　鈴木道明
鈴木紀郎　鈴木典之　須磨　章
せんぼんよしこ（そ）曽根英二
（た）高島秀之　高橋一郎
高橋　啓　高橋　泰　滝　大作
武谷雅博　田澤正稔　只野　哲
田中昭男　田原英二　田原茂行
（ち）千葉勉
（つ）露木茂　鶴橋康夫
（と）土居原作郎　戸田桂太
外崎宏司　富永卓二　土門正夫
（な）中崎清栄　中澤忠正
中島　僚　中田美知子　中谷英世
中津川輝夫　長沼士朗　中村敦夫
中村克史　中村季恵　中村耕治
中村芙美子　永守良孝　難波秀哉
（に）西川　章　新村もとを
西ヶ谷秀夫　丹羽美之（の）野崎茂
野添泰男　野田宏一郎　信井文夫
（は）萩野靖乃　橋口義春　橋本潔
林勝彦　林健嗣　林裕史　原由美子
原田庸之助（ひ）菱田市彦
備前島文夫　久野浩平　一杉丈夫
（ふ）深町幸男　福田雅子　藤井潔
藤井チズ子　藤代勝博　藤田晋也
藤久ミネ（ほ）星田良子
堀川とんこう（ま）松浦幸一
松尾羊一　松田輝雄　松平定知
松前洋一　松本明　松本修
松本国昭（み）三上義智
三国　章　水上毅　水野憲一
満島保夫　三村景一　三村千鶴
宮川鑛一　宮脇厳雄　明神正
（む）村上紘一　村上憲男
村上雅通　村上佑二　村木良彦
（め）銘苅栄昌（も）桃井　章
諸橋毅一（や）矢島良彰
薮内広之　山県昭彦　山崎隆保
山崎　裕　山路家子　山田良明
山田　尚　大和定次　山名光紀
山根基世　山辺麻未　山本恵三
（ゆ）湯浅和憲（よ）横沢　彪
横山英治　吉永春子　吉村直樹
吉村誠　吉村光夫（わ）和田智允

◆新入会員紹介

大西文一郎
（東海テレビプロダクション社長）

編集後記

日・韓・中フォーラムのメイン会場はNHK録画カメラがドデンと座り、ゲストや司会のカメラ位置、三ヶ国の制作者はどこへ誘導するかで喧々囂々。各局の段取りは案外我流で統一規格なんてものはない。「わが社ではカメラを引いてもらって」「いや壇上の机をズラして」「ちがう、オレンとこはそうではなく」と元社（員）の連中があだこうだ、とハリキル。昔取った杵柄も柄模様はいろいろで…てなわけ今回はフォーラム全面展開特集。

・**赤井朱美**氏（石川テレビ 会員）がわざわざ上京、熱心に中国作品を見ておられたのが印象的でした。

・事務局通信…個性派女優をめざす小坂理紗子の近況→ さっぽろ映画祭出品作品で前評判の高いオムニバス映画『ZONE3』で出演。DVD発売中なので、小坂「会員の皆様、ぜひぜひ見てね！」だって。このほかラジオCM（コカコーラ）など…「若いっていいなあ」ってつぶやく雅浩。